

論文の内容の要旨

申請者 森下 純子

論文題目

根治的治療の適応外となった進行性肝胆膵がん患者の受療体験と
生きたい思いに関する研究

〔研究の目的〕

根治的治療の適応外となった進行性肝胆膵がん患者の治療・療養過程の事象に基づく受療体験と生きたい思いを明らかにし、看護支援を検討することを目的とした。

〔方法〕

対象は、都内大学病院の進行性肝胆膵がん治療を専門とする診療科で、進行性肝胆膵がんと診断され根治的治療以外の治療を受けている患者 18 名とした。調査期間は 2017 年 3 月から 2018 年 8 月で約 17 か月間であった。調査方法は、半構造化面接法及び参加観察を行い、グラウンデッド・セオリー法を用いて分析した。本研究は、国立研究開発法人国立国際医療研究センター及び調査実施施設の倫理審査委員会の承認を得た。

〔結果〕

対象者の平均年齢は 67.2 歳 (±10.2 歳)、性別は男性 7 名、女性 11 名であった。がん種は肝がん 3 名、膵がん 12 名、胆嚢及び胆管がん 3 名、その中で遠隔転移を有している者が大半であり、治療法は全員が化学療法を受けていた。

根治的治療の適応外となった進行性肝胆膵がん患者の受療過程は、発覚期、診断・告知期、治療模索期、受療期、変調期の 5 つが抽出された。受療体験に関しては【病名が確定されず焦燥する】【余命を告知され絶望する】【医師とただ生き延びるための話がしたい】【苦境を乗り越えるための楽しみや心の支えを見いだす】【今の治療が中止になった先がみえない】などの 29 カテゴリーが生成された。29 カテゴリーを用いて各時期のカテゴリ関連図を作成し、最終的に「ただならぬ事態に巻き込まれる」「病名のみ留まらない多重告知を受ける」「傷つきながらも納得できる結論を求め続ける」「足元の小さな光を頼りに歩き続ける」「生死の境に在ることを痛感する」の 5 つのコアカテゴリが導かれた。

さらに、生きたい思いとして生への積極性や意思の強さなどを表すカテゴリは【きっと治る病気に違いない】【今ここで死ぬわけにはいかない】【生きられるかもしれない】【治療を続けて少しでも長く生きたい】【自分だってささやかな未来を思い描き続けたい】【生き延びるためにできることは何でもやりたい】【死にたくない】の 7 であった。一方、生への消極性や低迷などを表すカテゴリは【大それた願いなのかもしれない】【今度こそ乗り越えられないかもしれない】の 2 つが抽出された。生とは真逆の意味を持つ死という言葉で表された 2 カテゴリー【何もかも死が前提となってしまった】【どこかで死を見越している】は生への強い希求の逆説的な表現であり、生きたい思いに含まれると結論付けた。生きたい

思いは時期や出来事によって形象を変えながら複数存在することが示された。

〔考察〕

結果から、根治的治療の適応外となった進行性肝胆膵がん患者の受療体験の全体像と生きたい思いの変遷が明らかになった。

根治的治療の適応外となった進行性肝胆膵がん患者は、病名に加えて進行性で StageIV であること、治療手段は限定的で、きわめて難治であり治癒は望めないことが含まれるなど苛酷なものであった。また、発覚期から治療模索期にかけて、患者・家族が医療者に支援を求めないまま過ごしているという特徴も明らかになった。治療期は出現する様々な身体症状を甘受する様相がみられ、治療を継続することで少しでも長く生きたいという思いを抱いていたためであると推察された。また、治療効果が徐々に芳しくない状態になっていく変調期においては、患者の苦悩がさらに増すことが示唆された。

患者の生きたい思いの特徴として、一度にいくつもの告知をされることによって生きたい思いが押しつぶされ、何もかも死が前提となってしまった思いで覆いつくされることが示唆された。受療期に入ると積極性や意思の強さに関するカテゴリが複数出現するが、患者は自らが置かれている立場と将来の先行きが不確実であることを考慮したうえで、生きたい思いをコントロールしながら過ごしていた可能性がある。また変調期には死への思いが色濃くなる一方、生への願いも大きくなっていく様相がみられた。

看護師は患者の各時期における体験を把握し支援体制を構築するとともに、生き延びるために治療を受ける進行性且つ難治性のがんを抱える患者に対してより一層の関心を持ち、生きたい思いを軸として支援を考える必要がある。

〔結論〕

本研究では、早期がんや治癒可能ながん、或いは治療選択肢が複数あるがんとは一線を画した、根治的治療の適応外となった進行性肝胆膵がん患者の受療過程での体験、そして生きたい思いを明らかにした。これまで明示されることのなかった進行性且つ難治性のがんに罹患したがゆえに抱く患者の生きたい思いを示すことは、厳しい状況に置かれた患者の治療選択や継続、見直し、そして療養生活を支えるための一助となり得る。